

【ハイチコレラ支援事業に参加して】

国際医療救援部看護師 安藤享子

2011年1月7日～2月14日の約1ヵ月間、コレラ被害に対する緊急支援事業で、第3班要員としてハイチ共和国に派遣されました。ハイチは、中央アメリカの島の一つでドミニカ共和国と島を二分する西側に位置し、クレオール語とフランス語を公用語とする人口約950万人の国です。2010年1月にハイチ大地震が起こり、約31万人が死亡し、各国の援助団体が支援に入りました。同年9月にはサイクロンがハイチを襲い、上下水道設備が整っていない同国に、糞便で感染するコレラが10月に発生し、瞬く間に全国に大流行しました。

コレラは糞便を介して感染する病気ですが、ハイチでは1世紀以上コレラ感染者の報告がなく、国民全体が「コレラって何？」と予備知識もなく、「何だかよく分からない気味の悪い病気」として捉えられていました。医療施設も乏しく、コレラに罹ってもどうしていいか分からず、そのまま亡くなられた方も多かったようです。2011年6月現在で34万人を超す感染者を出し、5,397人の死亡者が確認されています。

ハイチに到着した時、いたる所が瓦礫の山で、80万人を超える人々がキャンプ生活を余儀なくされており、地震後1年を迎えたとは思えない状況でした。政情が不安定で、特に首都周辺はデモや放火が頻繁に起こり、南部で活動をしていた私たちも、時々宿泊地から出ないようにと活動が制限されることもありました。

私たちはイギリス赤十字社と協働し、ポルタピマンという南部にある旧病院を24時間体制のコレラ治療施設として改修し、現地の医師・看護師や、クリーナーやセキュリティ等のジェネラルワーカーと働きました。

現地では、医療スタッフに対してコレラに対する適切な医療や予防法の知識が提供できているかを確認して教育・指導等を行い、私自身は主に物品や薬品の在庫管理やジェネラルワーカーの教育・指導、患者データの処理を行いました。通訳を介してのコミュニケーションとなるので、相手に言いたいことがうまく伝わらないこともありました。また、段ボール箱に入っ



現地で活動する安藤看護師

た 600 人を超えるバラバラのカルテを一冊ずつ集めて整理し、どの地域に患者発生が多いかを探しました。

現地は、電気やトイレのない家も多くあり、川で用を足したり、川の水を生活用水として使用する機会が多く、コレラの治療だけでは根本的な解決にならず、衛生教育やインフラの整備の必要性を実感しました。そこで、治療施設のない地域へ行き、現地の看護師がコレラに対する基礎的知識や予防法、手洗いの方法をクレオール語で住民や現地の医療従事者に説明しました。この活動の継続や展開、他に患者の多い地域への介入を次の班に引き継ぎをし、帰国となりました。

日本の病院では人事・物品管理、情報管理等々、様々な職種が関わって行う業務のほぼ全てを、チームでカバーしなければならず、運営管理の難しさ、幅広い視野や知識の必要性を感じました。初めての派遣で、言葉の不安や戸惑いもありましたが、チームワークが良く、現地のスタッフとも協力し合え、多くの学びがあり、貴重な経験となりました。